

芥川賞作家・小田嶽夫による『醒世恆言』の翻訳について

—受容史における「第三の翻訳層」の一例として—

勝山 稔

はじめに

筆者は中国通俗文化の日本受容に関する考察の一環として、明代短篇白話小説集「三言」(『古今小説』)、『警世通言』、『醒世恆言』)に関する事例研究を試みているが、本稿では一九六一年に発表された小田嶽夫の翻訳と、その翻訳状況について検討することとしたい。

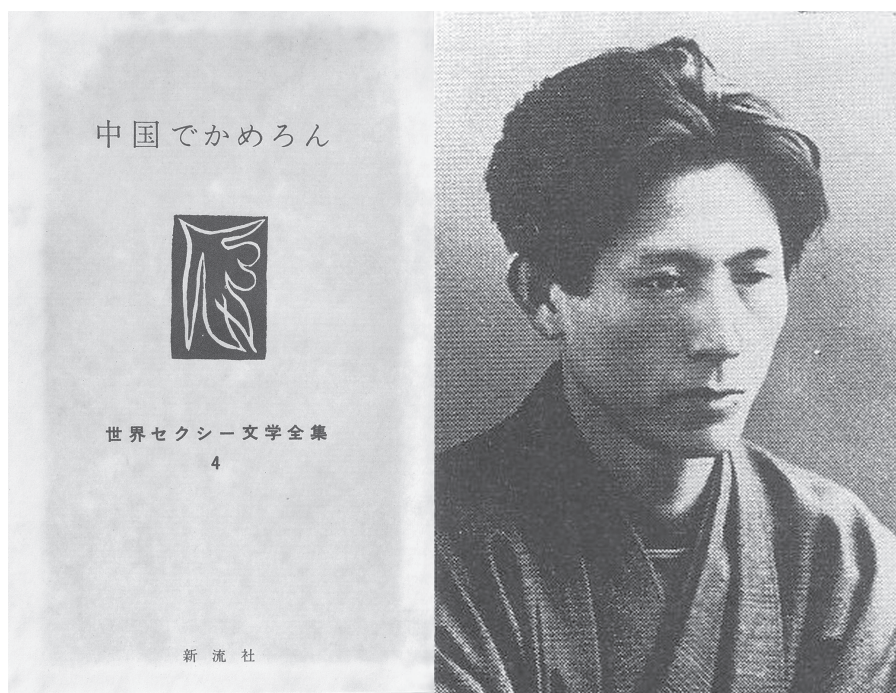
『醒世恆言』巻八「喬太守亂點鴛鴦譜」(以下「喬太守」)は、この「三言」と凌濛初が編纂した「二拍」(『初刻拍案驚奇』、『二刻拍案驚奇』)の選集である『今古奇觀』巻二八にも収録されている。清代では「三言」よりも『今古奇觀』の方が数多く出版されたこともあり、「喬太守」は『今古奇觀』所収の一作として日本でも広く通行している。そのためか日本に舶載された江戸時代には、唐話学者である岡白駒と澤田一齋によって訓点・傍訓が施された訓訳本^二が刊行され、曲亭馬琴を中心として翻案作品が出版された。また大正時代から戦前にかけても、上海の邦字出版社で刊行された口語訳^三や、大学関係者による翻訳が行われたほか、戦後になると平凡社による中国古典文学の叢書企画でも複数の訳出が試みられるなど、数多くの人々による翻訳が試みられた一篇である。

小論ではこれらの受容活動の中から、終戦後に翻訳を発表した芥川賞作家・小田嶽夫による翻訳について検討することとしたい。

一 翻訳者・小田嶽夫の経歴と訳業について

本章では、本篇の日本受容史上における小田嶽夫の翻訳の位置付けを明確化するために、小田嶽夫の経歴と、彼による著作・翻訳活動の概況を紹介する。

小田嶽夫は、大正から昭和にかけての小説家である。彼は新潟県高田市(現・上越市)の出身で、一九二二年東京外國語大學支那語學科を卒業と同時に外務省重細亜局に入り、一九二四年から二八年までの五年間、外務書記生として中国杭州領事館に赴任している。その後一九三〇年に外務省を退職すると、以後は文学創作に専念し、一九三六年には第三回芥川賞を受賞している。受賞作の『城外』は、杭州の日本領事館に派遣された青年官吏を主人公とした作品である。彼はその後も上海など中国各地を巡り、戦時中は第一次陸軍徴用員宣伝班員としてビルマ方面に従軍^三した。そして戦後には「郁達夫伝」(一九五〇)^四で平林たい子賞を受賞するなど、中国に関する著作を



小田嶽夫と翻訳集『中国でかめろん』（1961）

数多く残している〔五〕。

また彼は魯迅との関わりで言及されることが多い。例えば芥川賞受賞の翌年、改造社では『大魯迅全集（全七巻）』を刊行することとなった。その際には小田も参画することとなり、上海に渡航した彼は一九三七年に鹿地亘〔六〕との共訳で『大魯迅全集・第七巻（書簡・日記）』〔七〕を担当した。また一九四一年には『魯迅傳』〔八〕を著しているが、本書は竹内好『魯迅』〔九〕刊行に先行し、魯迅研究の草分け的存在となり、現在でも多くの先行研究〔一〇〕が存在する。

なお小田は翻訳も少なくない。茅盾〔一一〕や蕭軍〔一二〕、郁達夫〔一三〕、林語堂〔一四〕など戦前を中心に訳業が確認できる。戦後も『中国でかめろん』のほか、魯迅選集（青木文庫）の翻訳〔一五〕のほか、児童文学として『聊齋志異』の翻訳〔一六〕を行っているが、何れも現代中国語や文言小説の翻訳であり、彼の白話に関する語学的知識は未知数の域を出ない。

この小田嶽夫が、白話小説の翻訳を手掛けたのは、恐らく一九六一年の『中国でかめろん』が最初ではないかと思われる。本書に収録された作品は、清代の長篇白話小説『覺悟禪』や同じく清代の短篇白話小説集『覺世名言十二樓』〔一七〕、明代短篇白話小説の『醒世恆言』と『今古奇觀』、そして唐の柳宗元の作と思しき『河間傳』〔一八〕のほか、清代文言小説『聊齋志異』からも数篇を訳出している。ただ、本書解説によると『覺悟禪』『覺世名言十二樓』等は他者の翻訳に拠るところが多かったと述べているため〔一九〕、小田自身の白話小説の翻訳は『醒世恆言』と『今古奇觀』に限られると考えた方が妥当である。

『中国でかめろん』に収録された翻訳作品を掲げると、左記の通りで

ある。

- ① 「色の手ほどき」〔『覺悟禪』第三回〕¹⁰⁾
- ② 「ふしぎな腫れもの」(李漁作)¹¹⁾
- ③ 「男の嫁入り」〔『醒世恆言』第八卷〕
- ④ 「二本の髪の毛」〔『今古奇觀』第三十八回〕
- ⑤ 「貞婦豹変」(柳宗元作)¹²⁾
- ⑥ 「狐とふたりの男」(蒲松齡作)
- ⑦ 「狐の姉妹」(蒲松齡作)
- ⑧ 「俠女」(蒲松齡作)
- ⑨ 「巧娘」(蒲松齡作)
- ⑩ 「五通神(その一)」(蒲松齡作)
- ⑪ 「五通神(その二)」(蒲松齡作)
- ⑫ 「牡丹の精」(蒲松齡作)
- ⑬ 「狐女との睦み」(蒲松齡作)

このように本書における「三言」所収篇は「男の嫁入り(喬太守亂點鴛鴦譜)」であり、本作は『醒世恆言』巻八と『今古奇觀』巻二八に収録されている。

なお本書には「喬太守」のほかにも『今古奇觀』巻三八に収録されている短篇白話小説が「二本の髪の毛」と題して翻訳されている。この「二本の髪の毛」は『二刻拍案驚奇』巻一四「趙県君喬送黄柑具宣教乾餠白祥」¹³⁾であり、恐らくは『二刻拍案驚奇』における最初期の翻訳であることは間違いない。そのため受容史を探る上で重

要な事例であると言えるが、小論の目的とは異なるため、言及にとどめ、その翻訳状況については割愛する。

二 小田の解説に散見される翻訳準備の不足

1 不自然な収録作品の標記

『中国でかめろん』所収翻訳作品の一覧を見ると、収録作品集の記載が不自然であるのに気が付く。具体的に言えば、翻訳作品の出典に『醒世恆言』と「三言」の選集である『今古奇觀』が同列で標記されることはまずあり得ない。このような標記不統一の理由について、小田自身は本書巻末にある作品解説で、左掲の通り説明を加えている。それによると、

「男の嫁入り」は「醒世恆言」(原題「喬太守乱点鴛鴦譜」)に入られた一篇であり、「今古奇觀」にも編入されているが、訳者の所持の「今古奇觀」中のもは、「醒世恆言」中のものに比べ、小部分(日本文に直し六、七千字)削除されていたので、ここでは「醒世恆言」に拠った。¹⁴⁾

とあり、彼は『醒世恆言』と『今古奇觀』の版本上の差異から、「喬太守」の善本として『醒世恆言』の版本を選んだことが理解できる。しかし、それならば『今古奇觀』巻三八所収「趙県君喬送黄柑」も『醒世恆言』と同様に、『二刻拍案驚奇』で統一するのが妥当な判断である。また『中

国でかめるん』刊行当時、『二刻拍案驚奇』は既に古典文学出版社から標点本が刊行^{二五}され、且つ日本でも広く流通しており、更に小田の翻訳よりも早い一九五八年には松枝茂夫が『二刻拍案驚奇』の一部の翻訳を発表^{二六}している所からも、『二刻拍案驚奇』の入手は困難ではなかった可能性が考えられる。小田の解説では、魯迅の『中国小説史略』や、その翻訳である増田涉『支那小説史』^{二七}をはじめ、江戸儒学者の太田錦城、村松梢風の『聊齋志異』に関する言及など、多彩な引用を試みている。しかし原作である『二刻拍案驚奇』の入手に関しては何ら言及しておらず、原典の調達という面で支障を来す中での翻訳であった可能性が否定できない。

世界セクシー文学全集
編集—高橋邦太郎・小田嶽夫

本日発売

中国
でかめるん

●全8巻各巻三八〇円(各巻別)内容見本館呈
帯筒・装飾僅少

〇嬢の物語
ボクリイヌ・レアリョ
清水正二馬訳

カテリーナ二世
ザヘル・マンゾ
小野武雄訳

ソドムの百二十日
マルキド・サド
大塚正忠訳

新流社
東京千代田区三丁目三番地
電話70905

中国千夜一夜物語

公聞を許されな
かつ天下の奇書からさらに精選と珠玉篇を編
幻城と現界の機りなす限りなき儘驚きと解い知れ
鐘聲し或は哀歌しつゝ物語る男
女の喜陰悲陰思の姿が流麗な
宗臥によつて今の世に蘇える

増田涉訳
原九五四千五百

新流社
東京千代田区三丁目三番地
電話70905

新流社『聊齋志異』(1948年6月8日)と『中国でかめるん』(1961年1月13日) 讀賣新聞広告

なお『中国でかめるん』を出版した新流社は、終戦直後の一九四六年に中国古典叢書「中国千夜一夜物語」から始まり、飯塚朗訳『情史』^{二八}や増田涉訳『聊齋志異』^{二九}があるが、その後一九六七年を最後に^{三〇}出版活動は確認することができない。

そして翻訳集『中国でかめるん』は、この新流社による世界文学全集^{三一}の一環として企画され、その中国篇が小田氏に依頼されたものと思われるが、本叢書の性格上、本書は東北大学附属図書館本館、愛知大学豊橋図書館、國學院大學図書館のみであるほか、公立図書館でも名古屋市鶴舞図書館に所蔵されるにとどまり、「三言」の翻訳書としては稀覯本に相当するものと考えられる。

2 解説から垣間見える準備不足

まず『醒世恆言』巻八「喬太守」の概要を説明する。本作品のあらずじは、以下の通りである。

宋の景祐年間のこと。杭州の医師劉秉義の息子劉璞は、孫未亡人の娘珠瑛と婚約中だった。あるとき、たまたま風邪がこじれて悪化し、危篤状態に陥ってしまった。劉媽媽は吉事で病気を追い払おうと、反対する夫を押し切って婚礼を強行した。劉璞の病状を慮った孫未亡人は、珠瑛の弟の玉郎を女装させて、身代わりとして嫁入りさせ、三日後の里帰りの際、状況に応じて、珠瑛と取り換える手はずを整えた。劉家では婚禮の夜、重体の新郎と同室させることもできず、新郎の妹の慧娘と同室させた。

その夜、慧娘の美しさに心惹かれた玉郎は慧娘と通じ、互いに愛し合うようになった。その後、劉璞の病状は次第に回復したが、玉郎は里帰りの機会を得られぬまま、身代わりであることが発覚した。事は裁判ざたとなり、慧娘が生葉舗の裴政と婚約中であったため紛糾したが、喬太守の粋な裁きで円く治まった。裴政には玉郎の婚約者である文哥を与えることにし、玉郎は慧娘と、劉璞は珠璣と結婚させた。^{〔三二〕}

このように本作は「三言」所収篇の中でも複雑な筋立てで構成されており、巧妙に仕組まれたプロットによって展開する奇抜な顛末を語った作品として知られている。これについて、小田は作品解説の中で「この話は宋代に時代が取られているが、じつは明の嘉靖年間の実話であった」^{〔三三〕}と附言しているが、筆者が確認したところ、訳者が指摘する通り本作品は、実話に基づいた作品であることが先行研究で指摘されていた。

それは、「三言」研究の泰斗である孫楷第の研究^{〔三四〕}から始まる。孫氏によると、本作品は『笑史』に記された嘉靖年間に崑山で起きた事件が発端と考えられ、それが後に作品化され馮夢龍撰『情史』巻二「崑山民」に転載されたこと。また『情史』にも「小説載此事、病者爲劉璞」と付記する所から、すでにそれ以前に原型となる小説が存在した可能性を指摘している。そのため小田が目撃したのは、恐らく孫楷第の研究と思われるが、小田が翻訳した時点で孫楷第の研究は既に三〇年以上前のものであった。

孫楷第の後、譚正璧が検証を試みたところ、本作の来源は更に古

く『醉翁談錄』丙集卷之一「因兄妹得成夫婦」にあることが判明したほか、『情史』巻二「崑山民」の他にも『古今譚概』卷三六「嫁娶奇合」や『堅瓠癸集』卷之三「姑嫂成婚判」所引「暇弋篇」、『堅瓠秘集』巻之四「天縁」所引の『灌纓亭雜記』など、同一ないしは類似の話が存在すること、そして「喬太守」の内容を更に複雑化した『曲海總目提要』巻五「四異記」が存在することも判明している。これら譚正璧による研究は戦時中^{〔三五〕}のものであるが、戦後に『話本與古劇』^{〔三六〕}として出版されており、小田が翻訳着手前に入手できる可能性は高い。このように断片的な推論ではあるが、小田の作品解説からは、「三言」翻訳に向けた準備が充分行われていなかった可能性が否定できないのである。

以上、小田嶽夫の経歴と彼による「喬太守」に向けた準備状況を述べたが、これにより本論考で注目すべき点が浮き彫りとなるだろう。

それが「翻訳者層の細分化」という点である。明治大正時代の白話小説の翻訳者層は、江戸唐話学の流れを汲む民間の知識人と、大学関係者による翻訳という翻訳者層に分けることができた。しかしその後の大学設置数の拡大のほか、戦前には東亞同文書院大學など中国に設置された日本の大学の設置に伴い、大学教育で中国語を学んだ知識人が増加してきた。小田嶽夫もそのような新しい翻訳者層の典型的な事例であることが理解でき、この新しい翻訳者層の力量を知る手がかりとなるのである。果たして彼の翻訳はいかなるものであったのか。彼の翻訳状況を分析することとしたい。

二 小田嶽夫による『醒世恆言』巻八「喬太守亂點鴛鴦譜」の翻訳

それでは、「喬太守」の一部を抽出し、小田による翻訳の状況を確認したい。

本作が中国や日本で広く読まれ、派生作品が数多く生み出された理由は、作品設定の妙にある。それゆえ設定は通常の短篇白話小説よりも複雑であり、その複雑さを読者に無理なく理解させる必要がある。そのため、特に作品の冒頭は登場人物の紹介や、婚姻を取り計らう両家の事情を解りやすく読者へ説明する必要がある。

また翻訳者は、その巧妙に記述された原文を正確に理解し、過不足なく、かつ的確に訳文に反映させるかという、翻訳者としての力量がもつとも試される箇所である。

そのためここでは特に劉家の息子と娘の人となりの説明箇所と、息子の婚礼の段取りを決めるため仲人を派遣する箇所を検討したい。そこでまず原文を引用し、続いて現在の定訳とも言える駒田信二訳（以下「駒田訳」）^{三七}を掲げる。そしてその上で小田嶽夫の訳（以下「小田訳」）を紹介することとしたい。

なお、劉家と孫家における婚儀の取り決めであるが、初期段階においては両家が直接交渉することはせず、必ず両家の間に媒酌人が介在して婚約の手続きを進行しなければならなかった。例えば日用百科全書である『新編事文類要啟劄青錢』別集卷二、婚禮門の婚姻啟狀諸式にも「凡草帖、係媒氏先導意、已從許方通（およそ草帖は媒氏によって先ずその意向を伝え、許可を受けてから送る）」と、縁

談交渉の最初期に取り交わされる草帖を取り上げ、実際の民間レベルでもその手交が媒酌人によって執り行われると明記されている。また明代『正德會典』卷六九「庶人納婦」にも「先遣媒氏通言、女氏許之、次命媒氏納采納幣」と、まず媒氏が女家に伝言を行い、女家がこれを許可してから、次に媒氏に命じて納采納幣を執り行うとある。そのため縁談交渉から具体的な婚礼の取り決めに至るまでのプロセスでは、両家の間に介在する媒人にとって周旋することが礼制的にも法制的にも規定されていたのであり、ここではその媒人を張六嫂が担当している。

光陰迅速、兩個兒女、漸漸長成。珠姨便許了劉家、玉郎從小聘定善丹青徐雅的女兒、文哥爲婦。那珠姨、玉郎、都生得一般美貌、就如良玉碾成、白粉團就一般。加添資性聰明、男善讀書、女工針指。

（一）還有一件、不但才貌雙美、且又孝悌兼全。

閒話休題。且說張六嫂、到孫家傳達劉公之意、要擇吉日娶小娘子過門。孫寡婦母子相依、滿意欲要再停幾時、因想男婚女嫁、乃是大事、只得應承。對張六嫂道、「上覆親翁親母、我家是孤兒寡婦、沒甚大妝奩嫁送、不過隨常粗布衣裳、凡事不要見責。」張六嫂覆了劉公。（二）劉公備了八盒羹果禮物、並吉期送到孫家。孫寡婦受了吉期、忙忙的製辦出嫁東西。看看日子已近、母女不忍相離、終日啼啼哭哭。誰想劉璞因冒風之后、出汗虛了、變爲寒症、人事不省、十分危篤。喫的藥、就如潑在石上、一毫沒用。求神問卜俱說無救。（三）嚇得劉公夫妻、魂魄都喪、守在床邊、吞聲對泣。劉公與媽媽商量道、「（四）孩兒病勢恁樣沉重、料必

做親不得。不如且回了孫家、等待病痊、再擇日罷。」劉媽媽道、「(五) 老官兒、你許多年紀了、這樣事難道還不曉得。大凡病人勢凶、得喜事一沖就好了。未曾說起的、還要去相求。如今現成事體、怎么反要回他。」

(光陰は矢のごとく二人の子供はだんだん成長して、珠姨は劉家の息子と婚約がととのい、玉郎は小さいときから画家の徐雅の娘の文哥を嫁に迎える約束ができていた。珠姨も玉郎も生まれつき美貌で、まるで美玉をひきくだいて作り、白粉をまるめてこしらえたようであり、しかも天性聡明で、玉郎は学問が好きであり珠は針仕事が上手であった。(一) ほかにもう一つ、才能容貌ともすぐれているばかりではなく、親孝行で姉弟仲もよかった。

それはさておき、張六嫂は孫家へ行って劉公の気持ちを伝え、吉日を選んでお嬢さんを娶りたいといった。孫寡婦親子は互いにたよりあっているので、もうしばらく待ってもらいたいという気持ちはやまやまだったが、結婚は一生の大事と考えてやむを得ず承諾をし、張六嫂にいった。

「ご両親に申しあげてください。わたくしどもは孤兒と寡婦で、たいした嫁入り支度もしてゆけません。普段の粗末な衣裳だけです、万事おとがめくさいませんようにと」

張六嫂はその旨を劉公に返事した。(二) 劉公は礼物として蓋物八鉢の料理をととのえ、婚礼の日取りの書付をそえて孫家へとどけた。孫寡婦は日取りの知らせを受けると、あわただしく嫁入り道具をこしらえたが、見る見る日は近づいてきて、親

子は別れるのがつらく、一日じゅう泣いてばかりいた。

ところが、劉璞は風邪をひいたあと、汗を出して衰弱したの薬を飲んで石の上にこぼすようなもので、なんの効き目もなく、神参りをしたり易者に占ってもらったりしたが、みな助からないという。(三) 劉公夫妻はおどろいて生きた心地もなく、病床につきつきりで、声を殺して泣きあうばかり。劉公は夫人に相談をしていた。

「(四) 子供の病気がこんなに重くては、とても婚礼はできないだろう。いっそのこと、いったん孫家へことわって、病気がなおったら改めて日を選ぶことにしたらどうだろう」

すると劉夫人は、

「(五) あなた、いい年をして、こんなことをまだご存じないのですか。病人というものはどんなにひどくてもうれいことがあればよくなるものです。まだ話をもちかけていない者でも、たのみにいくほどののに、もうちゃんとしまっていることを、どうしてことわるうとなさるのです」 三八

この箇所を、小田は以下のように翻訳している。概ね原文に対して忠実に翻訳が行われているが、訳文を精読すると、小田の語学能力や彼の学識、そして当時の白話語彙の研究水準の面から留意すべき箇所が見られる。そのためここではこれらの箇所を傍線部を施し、該当語句を拾い上げながら、彼の翻訳の状況を確認したい。

月日のたつのは早いもので、ふたりの子供はだんだんと大きくなりました。珠姨は劉家と約束ができ、玉郎は小さいときから画家の徐雅の娘文哥ぶんがを嫁に迎える約束がきまっていました。珠姨も玉郎も生まれつきみめよく、さながら良玉をひきくだいて、白粉でまるめたようでありました。そのうえに利口で、息子は学問ができ、娘は針仕事が上手でした。(一)それからまた、才と顔がそろっているだけでなく、孝と悌(目上の人によく仕えること)とを兼ねそなえているのでした。

さて、張六嫂が孫家へ行き、吉日を選んで、娘さんに輿入れしてもらいたいという劉の意を伝えました。孫寡婦こけさんは、母子がたがいにたより合っている生活なので、もうしばらくこのままにしておきたい気持ちでいっぱいあります。しかし考えてみると、男も女も結婚というものはだいいしなので、承諾しないわけにはいかなく、で、張六嫂にたいして言いました。

「そちらのお父さん、お母さんにおっしゃってくださいませ。わたしのところは寡婦こけに孤兒みなしごでして、なんの仕度もしてやれませず、ほんのふだんの粗末な着物だけです。そういうことをおとがめにならずにいただきたく存じます、とね」

張六嫂は劉にその返事を伝えました。(二)劉は八つのいれものに、料理や果物の贈り物を用意し、婚禮の日取りを孫家へ知らせました。孫寡婦こけさんは日取りを知らされると、いそいで嫁入りの品物をととのえました。

いよいよその日も近づきますと、母子おやこは別れがたくて、終日泣きじゃくりました。ところが、思いがけなく劉璜が、風邪を

ひき汗を出し過ぎて衰弱したのがもとで、寒症になり、人事不省、危篤状態になりました。薬を飲んでも石の上にごぼすようなもので、いつこうにききめがありません。神さまに祈ったり、占ってもらったりしても、助からないと言われます。

(三)劉夫妻は魂もなにもぬけはて、枕べにむかい合っていて、声をのんで泣くばかりです。劉は細君に相談して言いました。

「(四)息子の病気がこんなに重くては、婚禮はできない。孫さんのところへお知らせして、病気が直ってから、改めて日を選ぶことにしよう」

細君が言いました。

「(五)あなた、いい年をして、まだこんなことをご存知ないのですか。たいてい、病人はどんなにわるくても、祝言をすれば一度に直るものです。まだ話のないものでも、話をもち出すくらいなのに、どうして話のきまっているものを、ことわることでありますか」(三五)

小田嶽夫の翻訳状況についてであるが、概観すると翻訳水準が高く、原文を理解した上で日本人読者にも理解出来る翻訳を試みようとしている姿勢が窺える。ただ一部の訳文の中には、幾つか注意すべき箇所が見られる。それは本作で使用されている語彙が、一般的な語彙とずれた表記が多く、それが原文の理解を困難にしている点である。

変則的な表現への対応 例えば傍線部(一)「還有一件、不但才貌雙美、且又孝悌兼全」であるが、この「不但(bu dan)」は、二つ

の文節や名詩介詞句をつないで並列を示す接続詞であり、「」であるばかりではなく、そのうえ「」という累加的な表現となる。そのため後節には「兒且 (ér qiě)」「又 (yòu)」などを用いて呼応関係を構成することが一般的であるが、ここでは「且又 (qiě yòu)」という「その上に、そればかりか」を表現する副詞が用いられている。このように「且又」の使用は、『醒世恆言』卷三三「十五貫戲言成巧禍」等でも確認できる。また次の「才貌雙美 (cái mào shuāng měi)」も「才貌雙全」が一般的であり、やや変則的な事例が少なくないのである。「孝悌 (xiào tì)」は「孝」すなわち父母に孝行を尽くすこと、「悌」は兄に仕え誠実を意味する書面語、「兼全 (jiān quán)」は、どちらも申し分ないことを示す形容詞である。この箇所でも重要な点は「孝悌」の解釈である。「孝悌」の原典は『論語』学而篇^{四〇}にあるが、「孝悌」は親に対して孝行で、かつ年長者に対して従順であるという「孝+悌」という異なる二種類の意味で構成されている。そしてこの表現を本作に当てはめてみると、孫寡婦の二人の子供である「珠姨」と「玉郎」の説明であり、二人の子供は、いずれも親孝行であり且つ目上の者に従順であったことを示している。

そのためこの箇所は「(孫寡婦の二人の子供は) 才色兼備であり、また親孝行の孝も目上の者への悌も、いずれも備えていた」という意味となる。駒田訳は「ほかにもう一つ、才能容貌ともにすぐれているばかりではなく、親孝行で姉・弟・仲もよかった」と、孫寡婦の家族内における状況として「孝悌」を「姉弟仲」と翻訳している。原文には「孝悌兼全」とあるので、姉にも弟にも「悌」の心があつたのであるが、駒田訳の場合、姉が弟に対する心情は「悌」に該当し

ない。そのため、ここでは姉弟仲ではなく、一般的な「悌」の心情を姉弟いずれも持っていたと考えた方がより自然である。そしてこの箇所を小田は「それからまた、才と顔がそろっているだけでなく、孝と悌(目上の人によく仕えること)とを兼ねそなえているのでした」としており、小田訳の方が駒田訳よりも妥当な表現であることがわかる。冒頭から駒田訳をしのぐ訳文を示した小田訳であるが、それ以後はどうであろうか。

問われる婚礼用語の知識 傍線部(二)「劉公備了八盒羹果禮物、並吉期送到孫家。孫寡婦受了吉期、忙忙的製辦出嫁東西」であるが、「八盒 (bā hé)」の「盒」は箱入りのものを示す量詞であり、「八盒の礼物」を意味する。「羹果 (gāng guǒ)」は羹^{あつもの}と果物を意味する白話語彙であり、「製辦 (zhì bàn)」は作り揃える、作り調えるの意味である。ここまでは特に問題はないが、本文に二度登場する「吉期 (jí qī)」の解釈は注意を要する。「吉期」は、めでたい日が原義であり、そこから転じて婚礼の日を意味する。また白話語彙では、婚礼の日から更に派生して結婚の日取りを知らせる通知状で用いる。つまり同じ「吉期」でも解釈が複数存在し、それぞれの解釈を前後の文脈から判断しなければならぬ。

その上で傍線部の箇所を再確認すると、劉公は八箱の羹と果物を準備すると共に、吉期を孫家へとどけた。孫寡婦は吉期を受け取ると、慌てて嫁入り道具を作り揃えた。という文脈となる。そのためこの「吉期」は婚礼の日を示すのではなく、婚儀六禮^{りくぐらい}としての「請期」に使用される書き付けに違いない。

六禮とは、①納采 ②結婚を申し込むこと、③問名 ④新郎側から使

者を派遣して相手の女性の生母に姓氏を尋ねること、③納吉⇨新郎側で嫁を迎える女性の良否を占い、吉兆が出れば女性の家に報告すること、④納徴⇨婚約をして金品を新婦側に与えること⑤請期⇨結婚式の日取りを取り決めること、⑥親迎⇨婿が自ら嫁の実家に行つて迎への挨拶を行うことである。庶民の六礼については『宋史』巻一一五「士庶人婚禮」條には、「士庶人婚禮、並問名於納采並請期於親迎成。」とあるほか、『東京夢華錄』巻五「娶婦」にも「下定了、即且望媒人傳語。遇節序、即以節物頭面羊酒之類追女家、隨家豐儉。女家多回巧作之類。次下財禮、次報成結日子。「下定」が済むと、ついたちと十五日に媒人が双方の家の挨拶を伝える。節句の日には婿方からその季節の品や、頭飾り、羊、酒など、その家の貧富に応じた品々を嫁方に贈る。嫁方では手芸品などの返礼をする。次には、結納金を贈る。その次に、婚礼の日取りを知らせる〔四二〕とあり、必要不可欠な儀礼の一つである。この箇所を駒田訳は「劉公は礼物として蓋物八鉢の料理をととのえ、婚礼の日取りの書付をそえて孫家へとどけた。孫寡婦は日取りの知らせを受けると、あわただしく嫁入り道具をこしらえた」と極めて的確に翻訳している。その一方、小田は「劉は八つのいれものに、料理や果物の贈り物を用意し、婚礼の日取りを孫家へ知らせました。孫寡婦は日取りを知らされると、いそいで嫁入りの品物をととのえました」としており、大意は同じであるものの、請期に使用する書状を彼が理解していたは、やや疑問が残る。

混在する文言と白話の対応 傍線部(三)「嚇得劉公夫妻、魂魄都喪、守在床邊、吞聲對泣」であるが、(三)では「嚇得(xia de)」と「魂

魄都喪(hun po dou sang)」の理解が問題となる。「魂魄」は、人間にある三魂七魄という魂の意味である。また一般的には「魂魄離壳(hun po li mai)」で、驚いてすっかり自分を失うと表現する。本作ではここでも通常と異なる言い回しを使用しているが、その内容は駒田訳とほぼ同じであろう。また「吞聲對泣(tun sheng dui qi)」の「吞聲」は、忍び泣く、声を出さないう泣くこと、或いは鳴き声を抑え、耐え忍ぶという書面語であるが、「對泣」は、向き合つて泣くという白話語彙であり、文言と白話が混在する表現である。定訳である駒田訳は「劉公夫妻はおどろいて生きた心地もなく、病床につきつきりて、声を殺して泣きあうばかり」と翻訳している。その一方、小田はこの箇所を「劉夫妻は魂もなにもぬけはて、枕べにむかい合つていて、声ののんで泣くばかりです」としており、「魂魄都喪」の驚きのニュアンスが含まれていないものの、駒田訳に匹敵する高いレベルの翻訳であることは間違いない。

難解な「回」の解釈 次の傍線部(四)「孩兒病勢恁樣沉重、料必做親不得。不如且回了孫家、等待病痊、再擇日罷」であるが、ここでは学界で注目されている語彙が登場する。それが「恁樣(nen yang)」である。恁様は、「恁般(nen ban)」と同様に「このように」を示す白話語彙である。基本的に「這般(zhe ban) 這樣(zhe yang)」那般(na ban) 那樣(na yang)」と同義として扱われるが、(明代という)特定の時代に用いられた白話語彙であることが、佐藤晴彦氏の研究〔四二〕で明らかになっている。「沉重(chen zhong)」は、重い責任や負担を示す俗語。そして「料(liao)」は推し量る、推測する。〜と思う。「做親(zuo qin)」は「作親(zuo qin)」と同様、縁組みや結婚するといふ

動詞である。ただ、ここは婚儀を執行するという意味であろう、直後の「不得 (zuò qǐn bù dé)」を接尾することで、～することが出来ない。～してはならないことを示す。そのためこの一文は「子供の病状がこのように重く、きつと縁組みすることが出来ないに違いない」という意味となる。次の「不如 (bù rú)」は、物事や行為の利害損得などを比較する動詞で、～に及ばないという意味。直後の「且 (qiě)」は「暫且 (zàn qiě)」と同じく、しばらく、ひとまずなどを示す副詞である。次の「回 (huí)」は様々な解釈が考えられる。前後の文脈から(孫家へ)返事をする、もしくは(孫家からの要請を)断る、の可能性が考えられる。「病痊 (bìng quán)」は、病気の快方を示す白話語彙である。そのためこの箇所は「ひとまず、孫家に断りを入れて、病気の回復を待つて、再度日取りを決めるべきだろう」もしくは「ひとまず病気の回復を待つて、再度日取りを決めるよう、孫家に返答するべきだろう」という意味となり、原文にある「回」の解釈が難しい。

駒田訳は「子供の病気がこんなに重くては、とても婚礼はできないだろう。いつそのこと、いったん孫家へことわって、病気がなおつたら改めて日を選ぶことにしたらどうだろう」と「回＝断る」と訳している。その一方小田は「息子の病気がこんなに重くては、婚礼はできない。孫さんのところへお知らせして、病気が直つてから、改めて目を選ぶことにしよう」とある。訳文から「回＝返事をする」と解釈したと推測できるが、原文にある「等待病痊(病気の回復を待つて)」が訳文に反映されていない。当たり障りのない自然な訳文であるが、日を選ぶように孫家に返答するのが原義であり、全体的な理

解には問題が残ると言えよう。

作品理解の鍵となる奇想天外な発言　そして傍線部(五)「老官兒、你許多年紀了、這樣事難道還不曉得。大凡病人勢凶、得喜事一沖就好了。未曾說起的、還要去相求。如今現成事體、怎么反要回他」であるが、この劉夫人の発言が、その後の作品展開で重要な意味を持つため、正確な理解が求められる重要な箇所である。

ここにある「老官 (lǎo guān)」は、「あなた」を示す亭主に対する呼称であり、南方方言の一種。次の「難道 (nán dào)」は、文末に「嗎」や「不成」を置き、「まさか～ではないか(いいや、そうではない)」となる。ここでは直後にある「還不曉得(まだ解っていない)」に対して反語的表現を構成している。そして「一沖 (yī chōng)」は、ここでは二つセットになったものを数える量詞であり、それが「息子の病気回復」と「婚礼の挙行」という二つの慶事であろう。そして「要回 (yào huí)」は、取り返す、返却させる意味の動詞であり、ここでは婚礼の準備を意味する。

そのためこの箇所は「あなた、あなたはもう多くの年齢を重ねているのに、まさかこのようなことも知らないのですか。たいてい病人というものはどんなに病状が重くても、慶事があれば両方ともうまくゆくものなの。まだ話していないことを持ち出すのですから、既に(縁談が)まとまっているものを、どうして後戻りをしなければならぬというのですか(いいや、後戻りすることはできない)」という意味となる。

この箇所を小田は「あなた、いい年をして、まだこんなことをご存知ないのですか。たいてい、病人はどんなにわるくても、①祝言

をすれば一度に直るものです。まだ話のないものでも、話をもち出すくらいなのに、どうして話のきまつているものを、②ことわるごとがありますか」としている。傍線部①にある祝言は、賀詞や祝詞。祝いや祝儀のほか、婚礼や結婚式も意味する。小田がこの中から如何なる解釈を選んだかは不明であるものの、婚礼を前提とした解釈を行った可能性が高い。その意味では妥当な翻訳と言えるが、問題点も残ると言わざるを得ない。それは(1)婚儀における二つの慶事が明示されていないこと。(2)「一沖」を「一度に」と翻訳していること、そして(3)進行していたものを前に戻すという「要回」のニュアンスが、翻訳に反映されないまま「ことわる」と翻訳していることという三点であり、その点において、画竜点睛に欠ける面が否定できない。

ただ、駒田訳でも「あなた、いい年をして、こんなことをまだご存じないのですか。病人というものはどんなにひどくても①うれしいことがあればよくなるものです。まだ話をもちかけていない者でもたのみにいくほどののに、もうちゃんとしまっていることを、どうして②ことわろうとなさるのです」と翻訳しており、こちらもやや正確さに欠ける訳文である。このように駒田訳でも難儀している状況を鑑みるに、この箇所は個人の翻訳技術というよりも、当時の学界における翻訳水準においては、正確な翻訳が困難であったとも考えられる。

以上の通り、小田訳の概略を紹介した。小田訳は駒田訳と比較しても、然程遜色のない水準にあり、これまでの考察だけでは両者の翻訳の特徴を明確に判断することが難しい。そのため、ここでは、より翻訳の難しい箇所——すなわち、双方の家の間で複雑なやり取り

りが行われる箇所を紹介し、二人の翻訳状況についてさらに検討を加えたい。

劉媽媽道、「依著我、分付了張六嫂、不要題起孩兒有病、竟娶來家、就如養媳婦一般。若孩兒病好、另擇吉結親。倘然不起、媳婦轉嫁時、我家原聘並各項使費、少不得班足了、放他出門、卻不是個萬全之策。」(六) 劉公耳朶原是棉花做的、就依著老婆、忙去叮囑張六嫂不要泄漏。自古道、『若要不知、除非莫爲。』劉公便瞞著孫家、那知他緊間壁的鄰家姓李、名榮、曾在人家管過解庫、人都叫做李都管。爲人極是刁鑽、專一要打聽人家的細事、喜談樂道。因做主管時、得了些不義之財、手中有錢、所居與劉家基址相連、意欲強買劉公房子、劉公不肯、(七) 爲此兩下面和意不和、巴不能劉家有些事故、幸災樂禍。曉得劉璞有病危急、滿心歡喜、連忙去報知孫家。孫寡婦聽見女婿病凶、恐怕防了女兒、即使養娘去叫張六嫂來問。張六嫂欲待不說、恐怕劉璞有變、孫寡婦後來埋怨、欲要說了、(八) 又怕劉家見怪。事在兩難、欲言又止。

(一) わたしの考えでは、張六嫂にたのんで息子が病気だということはいわずに、このまま嫁入りさせて養女のようにしておくのです。もし息子の病気がよくなったら、あらためて日を選んで式をあげ、もしも助からなかったら、嫁が再婚するときは家を出した結納金や経費はかならず取りかえしてから出してやるのです。それが一番いい方法ではありませんか」

(六) 劉は人の言いなりになるたちだったので、女房のいうと

おりにして、すぐ張六嫂に息子の病氣のことを漏らさないようにたのんだ。

昔から「知られたくないことには触れぬがよい」という。劉公は孫家をだましたつもりだったが、そうはいかなかった。劉公の壁一つへだてた隣りに、姓は李、名は榮えいといって、以前よその家で質店の番頭をしていたのでみんなから李番頭と呼ばれている者がいたが、極めて狡猾なたちで、いつも人の家のつまらぬことをきき出しては、それをいいふらしてよろこんでいた。番頭をしていたときによからぬもうけをして、金をにぎっており、住居が劉家と敷地つづきなので、しきりに劉公の家を買いとりたがっていたが、劉公が承知しないため、(七)互いとうわべは仲良くしていたが心の中はそうではなく、劉家になにか事故があったら、そのわざわいを楽しんでやろうと、手ぐすねを引いていたところ、劉璞が病氣になって危いということを知って大よろこび。急いで孫家へ知らせにいったのだった。

孫寡婦は婿が重い病氣だときくと、娘の一生をあやまつてはならぬと思ひ、さっそく乳母に張六嫂を呼ばせてたずねた。張六嫂は、いわないでおけば劉璞にもしものことがあったとき、あとで孫寡婦にうらまれるだろうし、いつてしまえば(八)劉家でとがめを受けるだろうし、どうにも動きがとれず、いいかけては、やめた。(四三)

この箇所を、小田は以下のように翻訳している。

細君が言いました。

「わたしの考えでは、張六嫂に言いつけて、子供の病氣のことには触れないで、ともかく来てもらって、養女のようにしておくんです。もし子供の病氣が直れば、べつに日を選んで婚札を行なえばいいし、もしだめで、あの人がよそへ嫁入る場合は、結納金やいろんな経費を、すっかりとりもどしてから、出してやればいいんです。それが万全の策じゃありませんか」

(六)劉の耳はもともと綿でできています(やわらかく、すぐに人の言うことを聞く意)ので、すぐに細君の言うなりになり、急いで張六嫂にねんごろに頼み、ほんとうを明かさないように口止めしました。

昔から、知らないでおこうと思えば、なにもしないのがいちばんいい、と言います。劉は孫家をだましましたが、思いがけなくも次のようなことが起こりました。彼のすぐ隣の、姓を李、名を榮という、もと質屋の番頭をしていたので、みんなに李番頭と言われているのが、人間がひどく狡猾で、しょっちゅうよその家のつまらぬことを聞きだしては、人にひろめておもしろがるのでした。彼は番頭をしていたとき、性質たちのよくないことで、少し金をもうけていたので、住居が劉家と敷地つづきのところから、むりやりに劉の家を買いたいと思いましたが、劉が承知せず、(七)そのため両家は表面は仲よくしていても、じつさいは反対で、劉家になにかわるいことが起こってくればいいが、と待ちかまえていました。

そこへ、劉璞が病氣になり、危いと知ったものですから、喜

びにあふれ、さっそく孫家に知らせたのでした。

孫寡婦こびきんはお婿さんの病気がわるいと聞くと、娘の一生を誤ってはいけないと思い、すぐに乳母に張六を呼んで来てもらって、たずねました。張六は言わないでおけば、劉にもしものことがあつた場合、孫寡婦こびきんにのちに怨まれるし、(八) 言えは言うで、

劉家にわるく、両方の板ばさみになって、言おうとしてはまた口をつぐみました。^{【四四】}

俗諺を読み切れるか 傍線部(六)「劉公耳朵原是棉花做的、就依著老婆、忙去叮囑張六嫂不要泄漏。自古道、『若要不知、除非莫爲』劉公便瞞著孫家」であるが、ここでは複数の成語が明示的に、或いは暗示的に登場している。まず冒頭に登場するのが「劉公耳朵原是棉花做的」である。この箇所を直訳すると「劉公の耳は元々綿でできている」となるが、これは「(劉公の) すぐに人の言いなりになる」という俗諺の成句である。これは現在でも「耳朵軟(ěr duo ruǎn)」や「耳朵根子軟(ěr duo gen zi ruǎn)」と称され、しっかりした考えを持たず、人の話をそのまま自分の考えにしてしまうことを意味する。そのため、本作の正文では明示的に俗諺であると述べていない。これは中国人読者にとっては半ば常識に属する内容であるからだが、この種の表現は日本人の翻訳者にとっては却って難物に相当する。

その一方「若要不知、除非莫爲(ruò yào bù zhī, chǔ fēi mò wéi)」は「自古道(昔から)と云う」が前置しているので、成語であることが明示されている。これは『金瓶梅詞話』二二回、『官場原形記』五三回にある「若要人不知、除非己莫爲」と同義で、もし人に知られたく

ないなら自分がしなみに限るという原義であり、そこから転じて「悪事は必ず露見するという」意味の成語である。該当箇所ではその他に「叮囑(dīng zhū)」は、丁寧に頼み込むが原義で、懇ろに頼む、よくよく話しておくという動詞、「泄漏(xiè lòu)」は、(秘密などを)外に漏らす、もしくは(人に教えるべきではないことを)人に知らせるという意味であり、ここでは「泄漏」をどのように理解するかに点に注意を要する。

そのためこの箇所は「劉公はすぐに人の言いなりになる人物だったので、女房に言われた通り、人に漏らさないよう呉々に張六嫂へたのみこんだ。(しかし)昔から『悪事は必ず露見する』という通り、劉公はまんまと孫家をだましたが」という意味となろう。この箇所を小田は「①劉の耳はもと綿でできています(やわらかく、すぐ人の言うことを聞く意)ので、すぐに細君の言うなりになり、急いで張六嫂にねんごろに頼み、ほんとうを明かさないように口止めしました。②昔から、知らないでおこうと思えば、なにもしないのがいちばんいい、と言います。劉は孫家をだましましたが、③思いがけなくも次のようなことが起こりました」としている。小田は傍線部①の通り「劉公耳朵原是棉花做的(劉公の耳は元々綿でできている)」を直訳した上に通釈まで附記するなど、極めて丁寧な対応がなされている。しかしその一方、成語であることが明記されている傍線部②「若要不知、除非莫爲」は「知らないでおこうと思えば、なにもしないのがいちばんいい」と逐語訳にとどめている。これは駒田訳で「知られたいくないことには触れぬがよい」と、熟れた翻訳こなをしているのは対照的である。また波線部③は訳者による(原文

にはない) 説明的な加筆である。基本的に小田訳は訳者による加筆は少ない。しかし、ここでは文脈の理解のためにやむを得ぬ措置であったのではないかと考えられる。

傍線部(七)「爲此兩下面和意不和、巴不能劉家有些事故、幸災樂禍」であるが、ここでは複数の慣用句のほか、文言と白話語彙が混在しており、翻訳者の学識の有無が試される箇所である。「爲此(wéi cǐ)」は、このために、そのために、ここでという意味の接続詞で書面語、「兩下(liǎng xià)」は双方、両方、「面和意不和(miàn hé yì bù hé)」であるが、「面和」は顔が穏やかであることを示す形容詞で、「面和(合)心不和」は、表情は穏やかだが、心穏やかではないことを示す熟語である。「巴不能(bā bù néng)」は「巴不得」と同じく(実現可能なことに対して)切望する、(強く)希望する意味の白話語彙、「幸災樂禍(xìng zāi lè huò)」は、他人の災禍を喜ぶという成語である。よってこの箇所は「そのため両家は、表向きは穏やかであるが心中は穏やかではなかった。劉家に何か事故があればその不幸を喜んでいた。」という意味となろう。駒田訳は「互いにうわべは仲良くしていたが心の中はそうではなく、劉家になにか事故があったら、そのわざわいを楽しんでやろうと、手ぐすねを引いていたところ」と翻訳している。的確であるが、傍線部は原文にはない加筆である。その一方この箇所を小田は「そのため両家は表面は仲よくしていても、じつさいは反対で、劉家になにかわるいことが起こってくれればいいが、と待ちかまえていました」としており、こちらも熟れた訳文とするために幸災樂禍——他人の災難を自分の幸いとし、人の不幸を楽しむ態度を加筆している。

傍線部(八)「又怕劉家見怪。事在兩難、欲言又止」であるが、「見怪(jiàn guài)」は(多く自分に対し)咎められる。悪く思う。「事在两難(shì zài liǎng nán)」は事が双方ともに困難なこと、板挟みになるという成語、そして「欲言又止(yù yán yòu zhǐ)」も、口に出そうとしてやめること、口を開いて言おうとしたが口を閉ざすという成語である。そのため、この箇所は「また劉家からのとがめ立てを恐れ、板挟みになってしまい、言おうとしたが口をつぐんだ」という意味となろう。定訳である駒田訳は「劉家でとがめを受けるだろ、どうにも動きがとれず、いいかけては、やめた」と、原文にある「見怪」を「とがめを受ける」と正確に翻訳している。その一方、この箇所を小田は「言えば言うで、劉家にわるく、両方の板ばさみになって、言おうとしてはまた口をつぐみました」としており、「見怪」の正確さでは駒田訳に一步譲っているものの、小田も複数の成語の翻訳には的確に対応していると見えよう。

次に作品の後半部分を検討する。ここでは、裴九老と劉秉義が裁判に訴え、喬太守がその取り調べを行う場面を紹介したい。

裴九老跪上去訴道、「小人叫做裴九、有個兒子裴政、從幼聘上劉秉義的女兒慧娘爲妻、今年都十五歲了。小人因是老年愛子、要早與他完姻。幾次央媒去說、要娶媳婦。那劉秉義只推女兒年紀尚小、勒肯不許、(九)誰想他縱女賣奸、戀著孫潤、暗招在家、要圖賴親事。今早到他家理說、反把小人毆辱。情極了、來爺爺臺下投生、他又起來扭打。求爺爺作主、救小人則個。」喬太守聽了道、「且下去！」喚劉秉義上去問道、「你怎麼說？」劉公道、「小

人有一子一女。(一〇) 兒子劉璞、聘孫寡婦女兒珠姨爲婦、女兒便許裴九的兒子。向日裴九要娶時、一來女兒尚幼、未曾整備妝奩、二來正與兒子完姻、故此不允。(一一) 不想兒子臨婚時、忽地患起病來、不敢教與媳婦同房、令女兒陪伴嫂孀子。那知孫寡婦欺心、藏過女兒、卻將兒子孫潤假妝過來、到強奸了小人女兒。正要告官、這裴九知得了、登門打罵。小人氣忿不過、與他爭嚷、實不是圖賴他的婚姻。」

(裴九老が、ひざまずいたまま進み出て訴えた。

「わたくしは裴九と申します。裴政という息子がおりまして、幼いときからあの劉秉義（へいぎ）の娘の慧娘を妻にする約束をしておりまして、今年二人とも十五歳になります。わたくしは年をとりまして息子が可愛く、早く結婚をさせてやりたいと思ひまして、なんども仲人をたてて嫁にもraitたいと申しいれたのですが、あの劉秉義は娘がまだ年が若いからといってことわるばかりで、どうしても承知いたしません。(九) ところがなんと、彼は娘にふしだらなまねをさせ、孫潤という者に惚れさせ、ひそかに家へ引きいれて、縁談をごまかそうとたくらみましたので、今朝、彼の家へ話をつけにいきましたところ、あべこべにわたくしをなぐつて恥ずかしめたのでございます。わたくしが我慢ができません。太守さまのところへ訴えにまいりましたところ、彼はまた追いかけてきて、つかまえてなぐりかかったのでございます。どうぞ太守さま、お裁きをなさつてわたしをお助けくださいますようお願いいたします」

喬太守はそれをきくと、

「しばらくさがつておれ」

といい、こんどは劉秉義を呼びよせてたずねた。

「おまえには、どういふいふんがあるのか」

「わたくしには息子と娘が一人ずつございまして、(一〇) 息子の劉璞は孫寡婦の娘の珠姨を嫁にもらい、娘は裴九の息子のところへやることになっておりました。先日、裴九が嫁取りをしたいといつてきましたときには、一つには娘がまだ年が若く、嫁入り道具もとのつておりませんでしたし、また一つにはちよつど息子の婚札をするときでもありましたので、それのことわつたのでございます。(一一) ところが婚札のときに、息子が急に病気にかかりまして、嫁といつしよに寝させるわけにはいかなくなりましたので、娘に兄嫁の相手をさせたのでございます。ところがなんと、孫寡婦はひどい女で、娘をかくしておいて、息子の孫潤を花嫁に仕立ててよこしてまいりました。わたくしの娘を強姦したのでございます。ちよつどお上へ訴えようとしておりましたとき、この裴九がそれを知つて、わたしの家に来てなぐつたり罵つたりしましたので、わたくしは腹が立つてなりません、彼と喧嘩をしたというわけでございます。決して縁談をごまかそうとしたわけではありません」(四五)

この箇所を、小田は以下のように翻訳している。

裴九はひざまずいたままにじり出て、訴えました。

「わたくしと裴九と申します。裴政という伴がおりまして、幼

い折からあの劉秉義(へいぎ)の娘さんの慧娘を妻にする約束をいたしておりました。今年ふたりとも十五であります。わたくしこと年もとり、子供が可愛いものですから、早く結婚をさせたいと思いい、なんべんも仲人をやって、婚禮のことを申し入れたのでございませうが、あの劉秉義が娘が年がいかないからと言って、いっかな承諾してくれません。(九)ところがあれは、娘にだらしないまねをさせ、孫潤といい仲にさせ、こつそり家へ呼んで、わたくしの結納金をごまかそうとしているのです。今朝あれの家へ行って話しましたところ、かえってわたくしをなぐりつける始末です。あまりのことに判官さまのところへ訴えにまいりますと、あれがまた追っかけて来まして、なぐりつけたのでございませう。どうか判官さま、お裁きくださって、わたくしをお助けくださいませ」

喬太守は聞くと、言いました。

「ひとまず控えておれ」

それから劉秉義を呼んで、

「おまえはなんと申し立てるか」

とたずねました。

劉が言いました。

「わたくし方(ほう)には伴がひとりと娘がひとりおります。(一〇)伴の劉璞は、孫寡婦(こけふ)の娘さんの珠姨(しゆい)と婚約をしてい、娘は裴九の息子と許嫁(いよめ)になっております。こないだ裴九が結婚を申し込んだとき、ひとつには娘が年がいつてい、嫁入り道具もとのつてい、ふたつにはちょうど伴が結婚式をあげるときでし

たので、承諾しませんでした。(一一)ところが、伴が式をあげる少し前に急に病気になりました。嫁と同室させるわけにはいけませんので、娘に嫁の相手をさせました。思いもかけなかつたことですが、孫寡婦(こけふ)は人をだまし、娘をかくして、息子の孫潤を嫁に化けさせていたのでありまして、むりにわたくしの娘を犯してしまつたのでございませう。

ちょうど告訴しようと思つていましたときに、裴九が知りまして、わたくし方(かた)へ来て罵りますので、わたくしは気が立つて来て、彼といさかいはじめたのです。そういうわけで、婚姻のことで彼をごまかそうなどという気はございませうでした」(一四六)

連発する通俗的な口調

傍線部(九)「誰想他縦女賣奸、戀著孫潤、暗招在家、要圖頼親事。今早到他家理説、反把小人毆辱。情極了、來爺爺臺下投生、他又起來扭打。求爺爺作主、救小人則個」は、裴九老の発言箇所であり、口語表現がダイレクトで表記されている。また(名裁判官である)喬太守の言動との対比として雅俗的な差別化を図つたためか、取り分け通俗的な言葉遣いが連続的に使用されている。

例えば「誰想(shuí xiǎng)」は、「誰想到(shuí xiǎng dào)」「誰料想(shuí liào xiǎng)」と同じで、思いがけず、意外にも、という連語であるため、それを知らずに直訳すると理解が難しくなる。「賣奸(mài jiān)」は、書面語「賣淫(mài yīn)」の白話語彙。「圖頼(tú lài)」は否認する、しらばくれる、言い逃れるという動詞、「今早(jīn zǎo)」も白話語彙で「今蚤(jīn zǎo)」と同じく今朝や今日の意味である。次の「理

説 (lǐ shuō)「も申し開きする、弁解する」という動詞の白話語彙であり、「毆辱 (ōu rǔ)「も、殴り辱めるといふ白話語彙である。次の「情極 (qíng jí)「も白話語彙であり、切羽詰まる、いらだつ。困り切るであり、通俗的な表現が続いている。そして「來爺爺臺下投生 (xiá tóu shēng)「は、このような賤しい身分の者が話す敬語表現であり、更に難解である。「臺」を他人に敬意を示すための接辞と解釈すれば「太守様の御許に」という意味とも考えられる。ただ「臺下」として「舞台の下」の意味があるので、ここではお白洲の場 (法廷の場) を示すのかも知れない。「投生」は「投奔生路 (tóu bēn shēng lù)「などのように、(他人に) 頼ってゆく、身を寄せるといふ意味である。また「扭打 (niǔ dǎ)「は、つかみ合って殴り合いをするといふ意味の動詞、そして「則個 (zé gè)「は、文末に置いて命令・願望・希求などの語気を強める助詞であり、これも白話語彙である。次の「作主 (zuò zhǔ)「は、自分の考えで行うや、采配を振るうといふ意味が一般的であるが、ここでは公正な処断を下すといふ白話語彙であろう。

そのため、この箇所は「こともあろうに彼は、娘にふしだらなことをさせ、孫潤に惚れさせると、ひそかに家に招かせ、結婚を反古にしてしまおうと企てました。今日、彼の家を訪れて弁解しましたが、こやつは逆に私を殴って私に屈辱を与えました。私は堪忍袋の緒が切れて、太守さまのもとへ絶ろうとしましたが、彼が再び現れて掴み合いの喧嘩になりました。太守さま、どうか公正なお裁きをお願いします。どうか私を救ってくださいませ」という意味となるが、工具書でも拾われていない表現があるほか、法廷の場でのみ使われる特殊な表現を理解していないと、文意の把握は極めて困難であり、

小田も相当苦戦している。

この箇所を小田は「①ところがあれば、娘に②だらしないまねをさせ、孫潤といひ仲にさせ、こつそり家へ呼んで、わたくしの③結納金をごまかそうとしているのです。今朝あれの家へ行つて話しましたところ、かえつてわたくしをなぐりつける始末です。あまりのことに④判官さまのところへ訴えにまいりますと、あれがまた追っかけて来まして、⑤なぐりつけたのでございます。どうか判官さま、お裁きくださつて、わたくしをお助けくださいませ」と翻訳しているが、傍線部①の「誰想」、②「縦女賣奸」の「縦」については、曖昧な表現を用いて切り抜けているという印象を拭えない。また傍線部⑤「扭打」の原義は「取っ組み合う+殴る」であるが、正確に内容を把握しているとは言えない。また傍線部③「要圖頼親事」の「親事 (qīn shì)「は、婚姻や結婚、もしくは縁談話であり、小田の「結納金をごまかそう」は誤りである。ただ④「臺下投生」については、的確に翻訳しているなど、夫々の箇所での正確性にバラツキが見られ、小田の悪戦苦闘の後が、ありありとかがえる。

その一方、『水滸傳』をはじめとした豊富な翻訳経験のある駒田信二は、やはり小田とは別格に近い巧みな翻訳をしている。

彼は「①ところがなんと、彼は娘に②ふしだらなまねをさせ、孫潤という者に惚れさせ、ひそかに家へ引きいれて、③縁談をごまかそうとたくらみましたので、今朝、彼の家へ話をつけにいきましたところ、あべこべにわたくしをなぐつて辱めたのでございます。わたくしが我慢ができなくなつて、④太守さまのところへ訴えにまいりましたところ、彼はまた追いかけてきて、⑤つかまえてなぐりかけたのでございます。どうぞ太守さま、お裁きをなさつてわたし

をお助けくださいますようお願いいたします」と翻訳している。傍線部②についてであるが、小田訳の「だらしなしい」は、一般の秩序から外れた乱れた状態を意味するが、駒田訳の「ふしだら」は、小田訳の「だらしなしい」に類似し、規律のないだらけた様態をしめすが、特に、男女関係について節操のない様子などを意味する表現であり、小田の解釈よりもより原義に近く、その他の箇所を含めても、駒田訳は小田訳で問題が残る箇所を、悉く正確に翻訳している。ちなみにこの箇所は、他の大学研究者も相当難儀している。例えば『儒林外史』の翻訳経験がある中国文学研究者・岡本隆三^{四七}の訳でも「わたくしが③前に贈りました結納金をごまかそうといたしましたので」^{四八}とあるように、小田と同じ解釈をしている。

見慣れた表記に潜む特殊な解釈 傍線部(一〇)傍線部(一一)は、白話小説で見慣れた表記の中に隠れている特殊な解釈を、的確に見出すかが問題となっている。

例えば傍線部(一〇)「兒子劉璞、聘孫寡婦女兒珠姨爲婦、女兒便許裴九的兒子」であるが、「聘(pìn) 爲婦(wéi fū)」は、を嫁としてもらうであるが、後半の句に登場する「許(xǔ)」は注意を要する。「許」は動詞や副詞、名詞や接続詞など十数種類の解釈があるが、ここでは(女性の側が)婚約する、嫁ぎ先が決めるという解釈が適合する。そのためこの箇所は「息子である劉璞は、孫寡婦の娘である珠姨を嫁としてもらい、娘は許裴九の息子に嫁ぎ先が決まっていた(婚約していた)」という意味となろう。この箇所を小田は「伴の劉璞は、孫寡婦の娘さんの珠姨と婚約しており、娘は裴九の息子と許嫁(いいなづけ)になっております」と訳している。ここで小

田は「女兒便許裴九的兒子」の箇所を許嫁と訳している。

この許嫁は「双方の親同士で、幼いうちから子ども結婚を約束しておくこと」^{四九}であるが、これは日本の慣習であり、それを直接明代の中国に当てはめるのはやや不適當である。恐らくは原文にある「女兒便許裴九的兒子」から日本の「許嫁」を連想したと思われるが、少なくとも小田訳では、「爲婦」「許」に関する婚礼用語を、充分把握し切れていない点が散見されると言わざるを得ないのである。

そして傍線部(一一)「不想兒子臨婚時、忽地患起病來、不敢教與媳婦同房、令女兒陪伴嫂子。那知孫寡婦欺心、藏過女兒、卻將兒子孫潤假妝過來、到強奸了小人女兒」であるが、「不想(bù xiǎng)」は、思いがけずという副詞であり、「想不到(xiǎng bù dào)」と同義と考えられ「図らずも、予想できず」という意味である。「臨(lín)」は、の際に、ししようとしてという意味で、動詞の前に置いてまもなくすることを示す介詞である。また「臨(時)」「臨(前)」「臨(以前)」などと呼応する。そのため「臨婚時」は、婚礼の際の意味であり、婚礼が直前に迫っている時期という意味である。「不敢(bù gǎn)」は、する勇氣がない。もしくは(事態が差し迫っていて)できない。「忽地(hū dì)」は「忽然」と同じく突然に。「同房(tóng fāng)」は、家族や夫婦という名詞もあるが、ここでは、床を共にする、夫婦が同衾するという動詞であろう。「嫂子(sǎo zǐ)」は、兄嫁「陪伴(péi bàn)」は付きそう、お供するという意味。「那知(nà zhī)」は「哪知道(nǎ zhī dào)」や「哪里知道(nǎ li zhī dào)」と同じく、ところがなんと、思いがけずという副詞である。そして「欺心(qī xīn)」は、悪い考えを起こす、良心に欺くという動詞であるが、前後の文脈の

中でのように解釈するの難い箇所である。「假妝(jiǎ zhuāng)」は「のふりをする、故意に真実ではない状況をつくり、真相を誤魔化すこと」。「強姦(qiáng jīan)」は、婦女を辱める、強姦するという意味である。そのためこの箇所は「思いがけず息子は婚礼の際に、突然病気を患ってしまい、息子と嫁は床を同じくすることができなくなり、娘に兄嫁の相手をさせました。ところが何と孫寡婦は悪心を抱き、娘をかくまい、誤魔化すべく息子の孫潤を来させて、私めの娘を強姦したのです」という意味となろう。

この箇所を小田は「①ところが、②伴が式をあげる少し前に急に病気になるました。嫁と③同室させるわけにはいきませんので、④娘に嫁の相手をさせました。思いもかけなかったのですが、孫寡婦(ごけさん)は⑤人をだまし、娘をかくして、息子の孫潤を嫁に化けさせていたのでありまして、むりにわたくしの娘を犯してしまつたのでございます」としており、傍線部①「不想」を逆接で翻訳しているが、原義にある予想に反してと言うニュアンスが反映されていない。傍線部②「臨婚時」は的確であるが、③の「同房」は誤訳である(同室なら「同屋」)、また④の「瘦子」も説明不足である。⑤「欺心」も悪い心を抱くという解釈が反映されていない。

一方の駒田訳は「①ところが②婚礼のときに、息子が急に病気になるかかりまして、嫁と③いっしょに寝させるわけにはいかなくなりましたので、④娘に兄嫁の相手をさせただのでございます。ところがなんと、孫寡婦は⑤ひどい女で、娘をかくしておいて、息子の孫潤を花嫁に仕立ててよこしてまいりまして、わたくしの娘を強姦したのでございます」と翻訳している。

こちらは、傍線部①「不想」や②「臨婚時」の「臨」の訳語が的確さに欠けるものの、③「同房」と④「瘦子」は無難に翻訳している。ただ⑤「欺心」は、論理の飛躍が甚だしく、孫寡婦は悪念を起こしたという原義が、訳文に正しく反映されていない。

傍線部(一一)は、然程難解とは思われない箇所であるが、小田訳と駒田訳は、何れも翻訳の精度の面で詰めの甘さが見られた。

三 小田嶽夫訳の翻訳水準

小論では、これまで『醒世恆言』巻八「喬太守亂點鴛鴦譜」における小田嶽夫の翻訳を検討してきた。

小田が当翻訳を出版した一九六一年に、平凡社は中国古典文学翻訳叢書である中国古典文学全集(一九五八―一九六一)と、中国古典文学大系(一九六七―一九七五)が進行中であり、大学に在籍する研究者が、中国古典文学作品の翻訳作業へと大量に動員されていた時期である。しかも翻訳担当者の不足から、白話小説を研究する若手研究者は勿論のこと、白話小説を専門としない研究者まで動員^{〔五〇〕}されている。そのため、このような翻訳叢書の計画で多忙だった状況のもと、書肆(新流社)は、召集を受けていなかった小田嶽夫に白羽の矢を立てたことが想像できる。

今回翻訳で比較対象として掲げた駒田信二は、この平凡社の翻訳出版プロジェクトに参加している。彼は中国古典文学全集で立間祥介^{〔五二〕}とともに『今古奇観』の翻訳責任者となり、その後のプロジェクトである中国古典文学大系の際にも、千田九一^{〔五三〕}とともに翻訳責

任者を担当している。(そのため、小論で平凡社翻訳叢書の陣頭指揮を執った駒田信二による翻訳と対照した理由は、駒田の翻訳が斯界において定訳と呼ばれている点のほか、平凡社翻訳叢書の参加者と非参加者の差異、そして大学研究者の翻訳と、大学で専門知識を受けた民間知識人の翻訳の対照という意味合いも含んでいる)

その上で、検討した傍線箇所的小田訳の傾向を内容毎に類別すると、

- (一) 駒田訳に比べて正確な箇所 (一一)
- (二) 駒田訳に比べて同等の箇所 (三) (五) (七) (一一)
- (三) 駒田訳に比べて不正確な箇所 (二) (四) (六) (八) (九)
- (一〇)

となる。このように駒田訳に比べると粗が目立つ小田訳ではあるが、駒田訳に比べて不正確な箇所に掲げられた六箇所も、大きな差異が見られたのは、六箇所の中で一箇所に止まっていた点は留意すべきであろう。このように斯界の最高水準にある駒田訳には、流石に一歩譲るものの、従来の支那愛好者による趣味的翻訳に比べると、高い精度での翻訳が行われていたことは確かであろう。

小田の翻訳が思いのほか高いレベルにあった原因は、どこにあるのか。これは彼が東京外国語学校卒業という学歴であると判断することも可能である。また個人的な努力という面も否定しない。ただ、本稿における考察を介して思い至るのは、小田嶽夫の経歴に一つの要因があるのではないか、そう筆者は推論している。

小田嶽夫は、東京外国語学校支那語學科を卒業後、外務省重細亜局に入省し、外務書記として中国の杭州領事館に勤務している。白話小説は明代の口語表現が反映しているが、その口語は北京官話ではなく、中国語の中でも呉方言(呉語)に該当する。そして小田の赴任先である杭州も呉方言のエリアに該当する。そのため白話小説を理解するには、極めて好適な言語環境といえるのである。それを裏付けるように「三言」所収篇の翻訳事例についても、同じ呉語が通用する上海の日本租界では、星野蘇山らによる桃義會によって白話小説の邦訳が行われていた事実が確認^{〔五三〕}できるほか、同じく上海や南京を中心に「三言」の翻訳活動を行った井上紅梅の事例^{〔五四〕}があるが、その何れもが工具書類が整備されていなかった時期の翻訳である。その上で小田による一連の翻訳も一九六一年であり、戦前より『華日辞典』編纂のために東亜同文書院で蓄積された白話語彙に関する知見が工具書として整備されるのは、愛知大学中日大辞典編纂所編『中日大辞典』(大修館書店刊)が刊行される一九六八年まで待たなければならなかったのである。

呉語がふんだんに登場する白話小説の理解には、やはり呉語に関する語彙知識が必要である。そしてその知識は、中国の特定の地方における方言に由来していた。そのため、その方言地域での四年間にもわたる勤務経験がある小田であったからこそ、「三言」所収篇の翻訳史の中でも画期と言える翻訳を実現できたのかも知れない。

本論では、小田による『醒世恆言』巻八に関する翻訳状況を、駒田信二の翻訳を比較することで、大学の研究者による翻訳と、大学で専門的な知識を習得した知識人による翻訳の状況の差異はいかな

るものかという関心で考察した。ただ、小論では紙幅の都合から幾つかの考察すべき課題が残ってしまった。日本における『醒世恆言』卷八の受容史という視点や、平凡社が企画した翻訳叢書との関係、そして彼が翻訳したもう一つの翻訳については、次の論考に譲るところとしたい。

おわりに

以上、本論の内容を要約すると、次の通りとなろう。

I 翻訳者の小田嶽夫は、大正から昭和にかけての小説家であるが、彼は東京外国語学校支那語學科卒業の経歴を持ち、中国に関する著作を数多く残している。そのため明治大正時代には見られなかった「大学で専門的知識を習得した民間の知識人」による翻訳事例として注目される。明治大正時代の白話小説の翻訳者層は、江戸唐話学の流れを汲む民間の知識人と、大学関係者による翻訳という翻訳者層に二分されていたが、その後の大学教育の普及により、大学教育で中国語や中国文学を学んだ知識人が増加した。小田嶽夫もそのような新しい翻訳者層（受容史における第三の翻訳層）の典型であり、この新しい翻訳者層の力量を知る手がかりとして、小田による『醒世恆言』卷八の翻訳を検討した。

II 翻訳集『中国でかめろん』は、新流社による世界文学全集の一環として企画された。新流社は、終戦直後から中国古典叢書を刊行し『情史』や『聊齋志異』など明清古典小説を中心に翻訳を出版している。しかし『中国でかめろん』は、本叢書の性格上、大

学附属や公立図書館に殆ど所蔵されていない。

III 小田の翻訳状況を把握するため、比較対照として大学の研究者・駒田信二の翻訳を比較対象として分析を試みた。その結果小田の翻訳水準は、駒田訳の水準に比べると僅かに及ばないものの、従来の支那愛好者による趣味的翻訳に比べると、高い精度での翻訳が行われていた。

IV 小田訳の高い翻訳水準は、彼自身が東京外国語学校支那語學科卒業という経歴があること。また外務省重細亜局入局により赴任先となった杭州領事館で、四年間の赴任経験があることが関係している可能性がある。小田の赴任先である杭州は、呉語の通用地域であり、白話小説の文体を理解するには好適な環境であったという点は無視できない。

本論文は、文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C 22K00287）「中国通俗小説受容の完全な体系化に向けた研究——民間翻訳の本格導入による多面的解析」の研究成果の一部である。

注

- 【一】白話短編小説集『喻世明言』（原題「古今小説」）『警世通言』『醒世恆言』の、いわゆる「三言」に対して『小説精言』（寛保三・一七四三）『小説奇言』（寶暦三・一七五三）および『小説粹言』（寶暦八・一七五八）の三書を、俗に「和刻三言」と呼ぶ。和刻三言の三書、いずれも「三言」や「二拍」などから抄出した中国の白話短編小説に句読訓点や傍調を施し、通読に便ならしめたもので、世に訓訳本といわれるところ、これに対して漢文の素養の乏しい者のために、かなまじりの読みくだし文の形にしたものを通俗書という。尾形仂「小説三言」解説『岡白駒沢田一斎施訓 小説三言』（ゆまに書房、一九七六）八六五頁参照。『小説精言』については、拙稿「短篇白話小説集から見た中国通俗文学の日本への伝播」（『アジア遊学』七〇号、二〇〇四）、村上雅孝「岡白駒と訓訳」（『国語学研究』五四号、二〇一五）、宮本陽佳「小説精言」「小説奇言」が依拠した版本——本文の性格をめぐって」（『和漢語文研究』一六号、二〇一八）等を参照。
- 【二】拙稿「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——新たに発見された桃義会（一九二四）の翻訳事例を中心として」（『国際文化研究科論集』二〇号、二〇一一）参照。
- 【三】竹松良明「小田嶽夫——南方徴用作家研究・ビルマ編（四）」（『大阪学院大学通信』五〇巻四号、二〇一九）、「小田嶽夫（二）——南方徴用作家研究・ビルマ編（四）」（『大阪学院大学通信』五〇巻五号、二〇一九）参照。
- 【四】小田嶽夫「郁達夫伝——その詩と愛と日本」（中央公論社、一九七五）。永島廉司「書評小田嶽夫『郁達夫伝——その詩と愛と日本』」（『中國文學報』二五号、一九七五）参照。

【五】伊藤虎丸「文士」小田嶽夫と中国」（『国文学——解釈と鑑賞』六四巻四号、一九九九）。

【六】鹿地亘は、昭和期の小説家、評論家である。本名は瀬口貢。東京帝国大学在学中から農民争議などの運動を体験し、『所謂社会主義文芸を克服せよ』（一九二七）、『小市民性の跳梁』（一九二八）などの評論を発表した。一九三四年の検挙後に中国へ脱出、反戦同盟の組織化に活動する。帰国後の一九四六年には米軍キャノン機関に拉致され、約一年間監禁された（鹿地事件）。戦後は日中友好に尽力した。短編集『労働日記と靴』（一九三〇）、『自伝的な文学史』（一九五九）、『回想記「抗日戦争」のなかで』（一九七八〜八〇）ほかの著書がある。井上桂子「中国で反戦平和活動をした日本人鹿地亘の思想と生涯」（八千代出版、二〇一二）、丸山昇「鲁迅と鹿地亘」（『櫻美林大学中国文学論叢』二二、一九九六）参照。

【七】小田嶽夫・鹿地亘共訳『大鲁迅全集・第七卷（書簡・日記）』（改造社、一九三七）。

【八】小田嶽夫『鲁迅傳』（筑摩書房、一九四一）。

【九】竹内好「鲁迅」（日本評論社、一九四四）。

【一〇】余禪延「竹内好による「文学者」鲁迅像の生成——小田嶽夫の「愛国者」鲁迅像への懐疑」（『立命館文学』六五五号、二〇一八）、松本和也「小田嶽夫『鲁迅伝』の形成と変容（一九四〇〜一九六六）」（『立教大学日本文学』一〇六号、二〇一一）、松本和也「昭和一〇年代における鲁迅受容一面——佐藤春夫・中野重治・小田嶽夫」（『立教大学日本文学』一〇四号、二〇一〇）、李平「小田嶽夫の鲁迅観——『鲁迅伝』を中心として」（『二松』一四号、二〇〇〇）等参照。

【一一】茅盾『小説大過渡期』（第一書房、一九三六）。

- 【二】蕭軍『第三代』（改造社、一九三八）、蕭軍（武田泰淳共譯）『愛すればこそ』（東成社、一九四〇）。
- 【三】郁達夫『過去——外六篇』（春陽堂、一九三二）、蕭軍・郁達夫・茅盾『同行者 支那現代小説三人傑作集』（竹村書房、一九三八）。
- 【四】林語堂『北京好日』（四季書房、一九四〇）。
- 【五】魯迅（田中清一郎共譯）『魯迅選集 阿Q正伝・狂人日記他一四篇』（青木書店、一九六三）。
- 【六】『少年少女世界文学全集四三・東洋編第三卷』三國志・水滸伝・聊齋志異ほか一編（講談社、一九五九）参照。
- 【七】『覺世名言十二樓』は、明末清初の文人・李漁による短編小説集。清代順治年間の一六五八年に成立。本書は明代短篇白話小説集「三言」や凌濛初編著の『初刻拍案驚奇』『二刻拍案驚奇』の流行を受けて編纂され、合影樓「奪錦樓」「三與樓」「夏宜樓」「歸正樓」「萃雅樓」「拂雲樓」「十香樓」「鶴歸樓」「奉先樓」「先我樓」「聞過樓」の合計一二篇三八回で構成されるところから「十二樓」という書名でも通用している。翻訳としては辛島驍（全譯中國文学大系二三）十二樓（東洋文化協會、一九五八）があるほか、坪田良江「十二樓」世界の設計——「夏宜樓」と「払雲樓」の対比を端緒として「鬢髻」一五号、二〇〇七）、川上陽介「小説字彙」『援引書目』に見える中国白話文学作品について——『覺世名言』「春燈閣」「燈月縁」ほか（『江戸文学』三八号、二〇〇八）、蕭涵珍「笠亭仙果の『七つ組入子枕』にみる李漁の『十二樓』——「合影樓」を中心として」（『東方學』一二三輯、二〇一二）などの先行研究がある。
- 【八】前野直彬の作品解題には『柳河東集』外集二所収。現在、東京の静嘉堂文庫に南宋板『柳河集』の本が所蔵されており、外集第二巻がその中

に含まれている。通行本の『柳河東集』とは、字句にかなりの相違があるので、両者を対校したものを翻訳の底本とした。この物語は内容が内容だけに、後世、興味本位に改作したものも伝えられている。とある。作品解題 河間の物語（河間伝） 柳宗元『唐代伝奇集（二）』（平凡社東洋文庫、一九六四）二七一頁参照。前野直彬の翻訳は「河間の物語（河間伝）」『唐代伝奇集（二）』（平凡社東洋文庫、一九六三）七七〜八三頁参照。

【九】「本書中の「色の手ほどき」は村松暎氏の、また「ふしぎな腫れもの」及び「貞婦豹変」は藤田祐賢氏の訳に成るもので、私の関与した部分は極めて僅少なものである。」小田嶽夫「解説」『中国でかめるん』三八七頁参照。

【一〇】『覺後禪』は、中国清代の小説で好色文学のひとつ。別名「肉蒲團」。全六卷二〇回。李漁の作と推測される。主人公の青年、未央生が色道遍歴の末、仏門に帰依するという物語であり、その性描写で知られる。詳細は村上知行「肉蒲團——中国奇書（日本文芸社、一九六三）、駒田信二「肉蒲團」（『國文學 解釈と教材の研究』一四卷一〇号、一九六九）、駒田信二「好色の戒め——「肉蒲團」の話」（『文芸春秋』一九六九）、戚秀梅「世俗小説『金瓶梅』と艶情小説『肉蒲團』等との比較分析」（『久留米大学大学院比較文化研究論集』九号、二〇〇一）、三宅宏幸「『近世説美少年録』『新局玉石童子訓』と『肉蒲團』」（『近世文藝』九七卷、二〇一三）等参照。

【一一】「ふしぎな腫れもの」（原題「十香楼」）は、李漁の短篇白話小説集「十二樓」に所収。李漁は明末清初の文人。字は笠翁。湖上笠翁、覺世禪官などの号がある。浙江省蘭谿の出身。青年期に明末の乱にあって官途に望みを断ち、以後各地を遊歴して、時の名士たちと交わり、晩年は杭州西

湖のほとりに住んで死んだ。若いころから非常な才子で、詩文はもとより、戯曲・小説にも手を染め、ことに劇作家として一世を風靡した。戯曲は『笠翁十種曲』が、小説には『無声戯』『覺世名言十二楼』。また隨筆集には『閒情偶寄』があり劇作法から演出論にいたるまで、演劇に関する事項を多く含んでいる。彼の戯曲・小説は一八世紀初頭に日本に伝えられ、読本などに影響を与えた。『十二楼』及び李漁については、向井信夫「江戸文芸に於ける「十二楼」の翻案について」(『文献』一四号、一九七〇)、中里見敬「李漁の小説——譚楚玉戯裡伝情、劉藐姑曲終死節」を中心に(『集刊東洋学』五八号、一九八七)、駱兵「李漁文学思想的审美文化論」(江西人民出版社、二〇一〇)、蕭涵珍「李漁の戯曲とその改編小説」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』一四号、二〇一一)、岡晴夫「明清戯曲界における李漁の特異性」(『日中文学文化研究』創刊号、二〇一一)、蕭涵珍「李漁の『玉搔頭伝奇』とその翻案作——曲亭馬琴から広津柳浪まで」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』一五号、二〇一一)参照。

【一三】「貞婦豹変」の原題は、「河間傳」で柳宗元の作と伝えられている。柳宗元は唐代の詩人であり、唐宋八大家に数えられる「古文」の名文家である。河東(山西省永濟県)の人。『柳河東集』四五卷が編まれ詩は約一六〇首がある。七九三年進士に及第。監察御史裏行りこうのとき、王叔文らが、即位した順宗を後ろ盾として推し進めた政治の改革運動に参加したが挫折した。順宗は退位し、彼も永州(湖南省零陵)の司馬に配流。後に、柳州刺史に遷され、奴婢を解放するなど多くの改革を行い、八一九年に卒した。柳宗元の『河間伝』については、溝部良恵「人間性の追求——柳宗元『河間伝』」(『月刊しにか』八卷一〇号、一九九七)、下定雅弘「河

間伝」をどう読むか——女性のすさまじい性欲と末尾の訓戒」(『岡山大文学部紀要』五一号、二〇〇九)参照。

【一四】本作のあらすじは以下の通り。宣教郎の呉約は、吏部の再任発令を待つて、臨安の清河坊の旅館に泊まっていた。旅館の向かい側の家に美人が居り、呉宣教の目の前をしきりにちらついていた。やがてその婦人の下男が介して、料理や返礼の品のやりとりが始まり、下男の口から、その婦人が趙大夫の夫人で、夫は留守中であることがわかった。夫人の美しさに心奪われ、呉宣教の思いはつのるばかりだった。二人の間は、ついに詩の応酬により、愛を明かすまでになった。ある夜、夫人に招かれて家を訪れ、酒食の歓待を受けたのち、床入りという時に、趙大夫が帰宅した。呉宣教はベッドの下に隠れたが、発見され縛られた。奸通の罪で臨安府に突き出すと言う趙大夫に、二千貫を贈って許された。翌日、趙家には誰一人いなかった。すべて仕組まれた芝居「紫火園」で、呉宣教はまんまとひっかかったものだった。小川陽一「三言二拍本事論考集成」(新典社、一九八二)三〇〇頁参照。

【一五】小田嶽夫「中国でかめろん」(新流社、一九六一)三七六頁参照。

【一六】凌濛初著(王古魯蒐録編註)『二刻拍案驚奇』(古典文学出版社、一九五七)。

【一七】『中国古典文学全集 一九 今古奇観下・三言・二拍抄』(平凡社、一九五八)。「今古奇観」の翻訳は駒田信二をはじめとした複数の翻訳者で実施されたが、「三言・二拍抄」の翻訳担当は、松枝茂夫が単独で担当している。

【一八】魯迅(増田涉訳)『支那小説史』(サイレン社、一九三五)。

【一九】飯塚朗訳「情史 中国千一夜物語」(新流社、一九四六)。

【二九】増田渉訳『聊齋志異 中国千夜一夜物語』（新流社、一九四八）。

【三〇】出版活動としては、一九六五年にヴィルヘルム・シュテークル（谷崎英男訳）『性心理の分析』（新流社、一九六五）が、一九六六年にヘンリー・ミラー（村上啓夫訳）『静かな日の情事』（新流社）の再版が確認されるが、それ以後は確認できない。また出版年鑑編集部編『日本の出版社』（出版ニュース社刊）によると、一九六八年版（一九六七年一月刊）、及び一九七〇年版（一九六九年一月刊）に新流社の掲載があるものの、一九七二年版（一九七一年一月刊）以降には掲載が確認できない。また出版ニュース社編『出版年鑑』（出版ニュース社刊）を確認すると、一九六七年版（一九六七年五月発行）には掲載があるものの、一九六八年版（一九六八年五月発行）以後は掲載が削除されている。両者は時期にややずれがあるが、一九六七年までは活動していること。そして、一九六八年～一九六九年の間に廃業・統合等が行われたのではないかと推察できる。

【三一】新流社『世界セクシー文学全集』シリーズは以下の通り。①ポアリス・レアージュ（清水正二郎訳）『O嬢の物語』（新流社、一九六〇）、②ザッヘル・マゾッホ（小野武雄訳）『カテリーナ二世』（一九六〇）、③マルキ・ド・サド（大場正史訳）『ソドムの百二十日』（一九六二）、④小田嶽夫『中国でかめろん』（一九六二）、⑤ピティグリリ（岩崎純孝訳）『コカイ・麻葉』（一九六二）、⑥ニサーミ『七曜妃物語』（一九六二）、⑦マリイズ・シヨワジイ（高橋邦太郎訳）『パリのどん底』（一九六二）、⑧大場正史訳『アラビアの夜ばなし』（一九六二）、⑨ロレンス・ダレル（福田陸太郎訳）『ブラック・ブック』（一九六二）、⑩ヘンリー・ミラー（村上啓夫訳）『静かな日の情事』（一九六二）。

【三二】小川陽一『三言二拍本事論考集成』（新典社、一九八一）一七三～一七四頁参照。

【三三】小田嶽夫「解説」『中国でかめろん』三七六頁参照。

【三四】孫楷第「三言二拍源流考」（一九三一年作、『滄州集』中華書局、一九六五）。

【三五】譚正壁『醉翁談録所録宋人話本名目考』（一九四二初稿）、同氏『宝文堂書目所録宋元明人話本考』（一九四二初稿）、同氏『三言兩拍本事源流述考』（一九四四初稿）。

【三六】譚正壁『話本與古劇』（古典文学出版社、一九五六）。

【三七】駒田信二訳『今古奇観（4）明代短篇小説選集』（平凡社東洋文庫、一九七四）。

【三八】駒田信二訳『今古奇観（4）明代短篇小説選集』一三六～一三七頁参照。

【三九】小田嶽夫『中国でかめろん』一〇一～一〇三頁参照。

【四〇】『論語』学而編「有子曰、其爲人也、孝悌而好犯上者鮮矣、不好犯上而好作乱者、未之有也、君子務本、本立而道生、孝悌也者、其爲仁之本与（有子曰く、その人と爲りや、孝悌にして上を犯すことを好む者は鮮なし。上を犯すことを好まずして乱を作すことを好む者は、未だこれあらざるなり。君子は本を務む。本立ちて道生る。孝悌はそれ仁を爲すの本なるか）」

【四一】入矢義高・梅原郁『東京夢華録』（岩波書店、一九八三）一八三～一八四頁参照。

【四二】佐藤晴彦「清平山堂話本」熊竜峯小説と「三言」——馮夢竜の言語的特徴を探る（『神戸外大論叢』三七巻四号、一九八六）、同氏「醒世恒言」における馮夢竜の創作（二）——言語的特徴からのアプ

ローチ」(『神戸外大論叢』三九卷六号、一九八八)、同氏「八醒世恒言」における馮夢竜の創作(二)——言語的特徴からのアプローチ」(『神戸外大論叢』四一号四号、一九九〇)、同氏「八警世通言」における馮夢竜の創作——言語的特徴からのアプローチ」(『神戸外大論叢』四三卷二号、一九九二)、同氏「八古今小説」における馮夢竜の創作(改稿)——言語的特徴からのアプローチ」(『神戸外大論叢』四四卷一、一九九三)等参照。

【四三】駒田信二『今古奇観(4)明代短編白話小説選集』一三八―一三九頁参照。

【四四】小田嶽夫訳『中国でかめろん』一〇四―一〇五頁参照。

【四五】駒田信二『今古奇観(4)明代短編白話小説選集』一七一―一七三頁参照。

【四六】小田嶽夫『中国でかめろん』(新流社、一九六二)一五五―一五八頁参照。

【四七】岡本隆三は、静岡県生まれの作家、中国文学者である。一九三七年東京外国語学校支那語科卒業。戦後横浜国立大学助教を務めるが辞職して文筆に専念。近現代文学が専門。翻訳書は『儒林外史(上巻)』(開成館、一九四四)、尾坂徳司共訳『新中国文学選集 丁玲作品集』(青木文庫、一九五三)、田中清一郎共訳『鲁迅選集第三卷(雑感集第一)』(青木文庫、一九五四)、『鲁迅選集第五卷(雑感集第三)』(青木文庫、一九五四)、『新中国文学選集 老舍作品集』(青木書店一九五五)等。

【四八】該当箇所の岡本隆三訳は以下の通り「ところが、かれは娘にだらしなまねをさせて孫潤に惚れさせ、ひそかに家に引き入れて、わたくしが前に贈りました結納金をごまかそうといたしましたので、今朝、かれの家へすじを通して参りますと、反対にわたくしを殴って辱しめたのでござります。あまりのことに知事さまのところへ訴えに参りますと、かれはまたしても追いかけて参りましてつかまえて殴りました。知事さまのお

裁きでわたくしをお助け下さいますようお願い申し上げます。」「中国古典文学全集一九卷 今古奇観(下) 三言二拍抄」(平凡社、一九五八)五三頁参照。

【四九】いい・なすけ「いひなづけ」【許嫁・言名付】(動詞「いいなすける(言名付)」の連用形の名詞化)(一)―(する) 双方の親同士で、幼いうちから子どもの結婚を約束しておくこと。(二) 親同士の意見で、幼い時から婚約している男女。また、夫あるいは妻になると決まった人。婚約者。フィアンセ。「語誌」動詞イヒナツクの原義未詳。婚約の慣例が生じイヒナツケという語が用いられたのは、中世以降のことで、上流武家において、嫁入り婚が男性支配型の婚姻として成立したころからと推測される。「語源説」(一)ユヒナツケ(結納付)の約転(『阿京俚言考・大言海』)。(二)イミナツケ(忌名付)のなまりか。結婚の際、夫となる男性が妻となる女性を呼ぶイミナを付けることから(江戸のかたきを長崎で「榎垣実」)。(三)ナツケはナツケ(懐)の義か(『綜合日本民俗語彙』)『日本国語大辞典(二)』(小学館、二〇〇〇)七八九頁参照。

【五〇】平凡社中国古典文学全集の『今古奇観』翻訳に参加したのは、村松暎(慶應義塾大学文学部専任講師)、伊藤淑平(北海道大学助手)、稲田孝、桑山竜平(天理大学外国語学部講師)、常石茂、尾上兼英(東京大学文学部助手)、大村梅雄、佐藤一郎(一九二八慶應義塾大学講師)、岡本隆三(横浜国立大学助教)であるが、後藤基巳は中国古代思想、前野直彬は漢詩が専門である。

【五一】立間祥介は、東京生まれの中国文学者である。慶應義塾大学名誉教授。一九四八年に善隣外事専門学校を卒業後に、外務省に入省。東京都立大学講師、一橋大学講師となる。後に慶應義塾大学教授。退任後に慶応大

- 学名誉教授となり、浜松大学教授も務める。戦後当初は、竹内好などの新中国文学研究運動に参加するが、古典白話小説から近代文学まで中国散文学作品を幅広く翻訳・紹介を行った。翻訳には『中国古典文学全集 三国志演義』（平凡社、一九五八）、『中国講談選』（平凡社東洋文庫、一九六九）、『中国古典文学大系 兒女英雄伝』（平凡社、一九七二）等。
- 【五二】千田九一は、山口県出身の漢文学者である。一九三六年東京帝国大学文学部支那文学科卒。竹内好、武田泰淳らの中国文学研究会に参加、戦後は機関誌『中国文学』の編集にあたる。また高見順らの文芸同人誌『日曆』にも参加した。戦後、小野忍とともに『金瓶梅』を訳した。著作としては『新・韓非子物語』（河出書房新社、一九五八）、小野忍共訳『中国古典文学全集 金瓶梅』（平凡社、一九五九）等。
- 【五三】拙稿「近代日本に於ける中国白話小説『三言』所収篇の受容について」新たに発見された桃義会（一九二四）の翻訳事例を中心として（『国際文化研究科論集』二〇、二〇一一）参照。
- 【五四】拙稿「井上紅梅の研究——彼の生涯と受容史から見たその業績を中心として——」（『東アジア海域叢書』小説・芸能から見た海域交流）汲古書院、二〇一〇）、同「支那に浸る人——井上紅梅が描いた日中文化交流」（『から船往来——日本を育てたひと・ふね・まち・こころ——』中国書店、二〇〇九）等を参照。